



史料紹介 「種痘摘要」

前澤 健（歴史研究所特任研究員）

「麻疹は命の品定め、疱瘡は面の品定め」といわれた疱瘡（天然痘）は、古くから人びとの生活を脅かしてきましたが、「種痘」の普及により1980年WHOより根絶宣言が出されました。種痘（天然痘ワクチン）^{げんちゅう}は、18世紀末にイギリス人のジェンナーが開発したものです。飯田下伊那でも、太田玄仲などにより遅くとも嘉永5年（1852）には種痘が行われていました。



太田用成

太田用成^{もちしげ}は、飯田藩士の館野家に生まれ、飯田藩医の太田家に養子に入り、医学を学びました。飯田下伊那での種痘の先駆者太田玄仲は養父です。明治維新後、公立飯田病院（明治6年3月扇町に開業）の副院長となり、その後浜松病院などへ移り、その地で『七科約説』を翻訳出版しました。同書は、明治前期医学を学ぶ者の教科書となりました。

「種痘摘要」（南信濃和田佐藤光弘家文書H-42）は、明治6年（1873）に公立飯田病院での太田用成の講義を聞いた医学徒（自称：虫識）がまとめたものとみられます。その内容は、種痘の歴史、苗の採り方、苗の選び方、接種方法、その後の経過、年齢による摂取量と、種痘全般におよぶものです。用成は、外国語で書かれた原書を相当数読んでおり、その知識をもとに講義をしたことが随所にうかがえます。また原書から得た知識だけでなく、アメリカ人の医師セムネンズに師事した時に学んだことや、飯田での臨床事例などを交えて講義を進めていたこともわかりま

す。虫識は「種痘摘要」末尾に「太田氏之述簡易名宝」と、用成の講義が「わかりやすく宝物」とであると書いています。ここからも用成が教育者としても優れていたことがわかります。

公立飯田病院は、診療だけでなく医師の養成も行っており、教育課程の概要は判明していますが、具体的な内容は不明でした。「種痘摘要」は、その空白を埋める史料です。また飯田での太田用成の業績も公立飯田病院の副院長であったこと以外は、ほとんどわかっていません。この点からからも「種痘摘要」は、重要な史料となります。

しかし、「種痘摘要」が南信濃和田の佐藤家の所蔵となった理由は、不明です。

《参考文献》

小林郊人編『下伊那医業史』、甲陽書房、1953年

近藤大知「飯田下伊那における牛痘法の導入時期について」、

飯田市美術博物館研究紀要32、2022年



種痘摘要